

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

folkloreとアメリカ文学研究：Mark Twainの “Jim Smiley and His Jumping Frog” を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2024-03-15 キーワード (Ja): 開拓民話, フォークロア, マーク・トウェイン, “Jim Smiley and His Jumping Frog” , アメリカ キーワード (En): 作成者: 山本, 祐子 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	https://doi.org/10.18956/0002000151

folkloreとアメリカ文学研究

— Mark Twainの“Jim Smiley and His Jumping Frog”を中心に —

山本 祐子

要 旨

本論は、Mark Twainの出世作である“Jim Smiley and His Jumping Frog”を文学研究においては始めて、folkloreという観点から作品解釈し、アメリカ文学史の初期を支えたAmerican humorの一端を分析するものである。これにより、現代人あるいは日本人には読み取れなかった“His Jumping Frog”の可笑しみを解き明かす。かつ世界でも類を見ない American folkloreの特殊性を考察し、アメリカ人の精神性の奥底に眠る“unprintable”な民話の世界を考察するのは、文学研究においては初の試みとなる。

キーワード：開拓民話、フォークロア、マーク・トウェイン、“Jim Smiley and His Jumping Frog”、アメリカ

はじめに

Mark Twainの“Jim Smiley and His Jumping Frog”(18 November 1865, 以後“His Jumping Frog”と略す)は、folkloreを元に執筆された笑話で、New York *Saturday Press*紙に発表されるやいなや、話題となり、ニューヨーク中を笑いの渦に巻き込んだとまで評された。人気のあまり、他新聞でも繰り返し転載され、海賊版の著書も数多く出回った。執筆業に煮詰まって極貧生活を送っていたTwainを、全国的な作家へと飛躍させた奇跡の作であり、亀井俊介の弁を借りれば、以後のTwainの「名声とイメージを」を支え続けた作品でもあった。

だがこのカエル笑話が、どうしてこれほど当時のアメリカ人を魅了し、笑わせてきたのかについて論じられたこともなければ、納得のいく説明も解釈も提示されてこなかった。アメリカの文学批評は口をそろえて、議論もないまま、この笑話を滑稽だとし、注目すべきTwainの出世作だと断じるため、日本のTwain研究者も追随する他なかったのである。ただし、そもそもこれのどこが滑稽なのかという根本的な疑問が、日本人研究者たちの間でくすぶってきたことは確かである。同様に感じているアメリカ人も増えているのではないだろうか。時代が変わりつつあるからだ。そこで本論はTwain研究においては初めて、folkloreという伝承文化の文脈から“Jumping Frog”を読み直し、アメリカ人が感覚的に、あるいは無意識的に、「滑稽だ」

と捉えてきたものの正体を明かすものである。ひいては、“Jumping Frog”がアメリカ文学の初期伝統 American humor の結実であり、アメリカ人の精神性に直接訴えかける爆笑の逸品であったことを証明したい。

しかし folklore の観点から “Jumping Frog” を文学批評するというのは、これまでにない、画期的な試みである。確かに民俗学研究において “Jumping Frog” は folklore を種本として書き直された再話文学と位置づけられ、その種本の発掘には強い関心が向けられてきた。しかし民俗学者は、当然ながら、畑違いの文学的論究や作品解釈に至ることはない¹⁾。一方の文学研究では “Jumping Frog” をあくまで作家作品として扱い、folklore の再話文学として認識してこなかった。というのもアメリカでは folklore という言葉がイギリスからもたらされると、自国の特殊性を鑑みず、使い勝手のいいように利用するばかりで、明確な定義づけがなされてこなかったからだ。学派や時代によっても意味が変わる混とんとした状況にあって、しかも新移民の国ゆえに folklore という存在を意識できなかったというのが実情であろう。そこで、本論にとっての American folklore とは何かを定義づけするところから始めなければならない。

1. 「開拓民話 / American folklore」の萌芽

18世紀末ごろから、開拓民たちは、開拓地の過酷な自然や労働を耐え抜くための慰みの一つとして、互いに持ち寄った体験談を披露し合う文化が生まれた²⁾。キールボート（貨物運搬用の平底船）にうずたかく荷物を載せてのろのろと川を下る間に、あるいは筏で夜の見張りに立っているとき、開拓移民団が幌馬車で果てしなく続く荒野を渡るときなど、長く苦しい作業のあいまいに、自慢の語りで仲間を楽しませてやるのである。著名な民俗学者 Bernard DeVoto によれば、開拓地では誰もがエンターテイナーだったという。語りといっても、相手を楽しませることが目的だったため、一つの personal narrative として洗練・完成されたものが出来上がっていく。面白い話は、喜ばれるので、場所を変えて繰り返し披露する。聞いていた方も、それを取り込んで、別の知り合いに語って聞かせてやる。などということが繰り返されて、パターン化された語りが民衆の間で生まれていった。それを、黒人民話、ネイティブ・アメリカン民話、メキシコ民話あるいはイギリス系民話と区別して、本論では「開拓民話」と呼び、本論にとっての “American folklore” とする。そして、この中でも特に発達した tall tale を中心に論考するものである。tall tale とは基本的に白人開拓民が地元の方言（話し言葉）で語っていく笑い話で、教訓や勸善懲惡の展開もない。身近な話題から、どんどんと誇張を重ねていき、最後には荒唐無稽な法螺話にまで膨れ上がらせて、笑わせるだけだ。“tall lying” とも言われている。

初期の tall tale として親しまれているのが、Jim Bridger (1804-81) である。彼は19世紀前半に活躍した伝説的な mountain man で、アメリカ内陸部のフロンティアや未開地を巡って

罨獵師や案内人として生計を立ててきた。生涯のほとんどを辺境の大自然で暮らしてきたこともあって、想像を絶する体験や自然の驚異に遭遇してきた。しかも当時は白人未踏だったYellowstoneで間欠泉や温泉を発見したことで、彼の語りは益々もてはやされることとなる。特にYellowstoneのpetrified forestにまつわる語りは秀逸だ。Jimによると、そこは、木々ばかりか若葉や新芽にいたるまでが化石化していて、化石の果樹園に入れば、化石の枝に実までついていたという。アメリカの奥地にはそんな珍しい場所もあるものと聞き入る仲間に、彼はこう続ける。化石の果樹園に入ると、枝先にルビーやサファイヤやエメラルドやダイヤモンドがたわわに実っていたから、もぎ取って、ポケット一杯にして帰ったと。まじめに聞いていた仲間は、最初から全て法螺であり、からかわれていたことに気付き、地団太を踏む。ちなみにpetrified forestは化石化した木々が集まる驚異の景観ゆえ、いまでは人気の観光名所となっているが、Jimはそこに足を踏み入れたことがない。

このようにtall taleはもはや誇張することよりも、相手を騙して笑うことが目的となっていた。もう一つ、Jimの語りに耳を傾けたい。彼は、未開地に向かう遠征隊や商隊にあって、頼れる案内人であり指南役であった。それゆえ新人を迎えるにあたって、インディアンと死闘を繰り広げたと時の話を聞かせてやる。Jimはそのとき6人のインディアンに追われていたという。だが携帯していた武器はリボルバーのみ。彼の馬は全速力で駆けたが、インディアンたちも騎乗で食い下がってくる。Jimは追っ手が迫るたび手綱を引いて敵を払いのけ、蹴落としていった。5度目に敵を蹴散らしたとき、眼前には深く大きな峡谷が広がっていた。さすがにこの距離は飛び越えられない。覚悟を決めて踵をかえし、敵と向き合った瞬間、双方から銃弾が放たれ、双方の馬に当たった。「ついに俺たちは、ナイフを手に、つかみあったのさ。一騎打ちだ。手強いインディアンだった——あんなにガタイの大きな奴は見たことがない。そりゃあ、長く熾烈な戦いだったさ。こっちが優勢かと思えば、次の瞬間、相手が優勢になっちゃう。だが、ついに——」、とここまで話したところでJimは黙ってしまう。過去の苦い思い出に言葉が詰まったのだろう。だが新入りは、続きが気になって仕方がない。「最後はどうなったんだい！」と促すと、Jimは真面目な顔をして答える。「インディアンが俺を殺したのさ」³⁾。

実に巧みな話芸である。クライマックス前にあえて間を置き、新入りに続きを催促させ、引き付けてからの落ちである。ここでようやく新入りは自分がからかわれていたことに気付き、ひどく悔しがるが、Jimら古参はその様子を見て大笑いするのである。これまで文学研究においては認識されてこなかったが、また民話研究においても明言することは避けてきたようだが、tall taleは法螺を膨らませることよりも、法螺を通して相手を騙すことが目的であった。つまり「開拓民話」から生まれたhumorの魅力は、一つに「騙す」ことにあったと本論では主張したいのである。これについては、本論第三章で改めて論じることとして、「開拓民話」の定義へと話を戻したい。

2. 新聞という媒介を得た「開拓民話」

上のような仲間内で盛り上がった「開拓民話」は、1840年から1860年代にかけて、新聞各社でこぞって取り上げられ、民話の“flush times”が訪れる⁴⁾。折しもこの時期は新聞の発展期にあった。そこで Twain の故郷ミズーリ州を例にとりて見ていくと、同州の総人口は1850年には682,044人であったが、1860年には1,182,012人と二倍近くに膨れ上がっている。一方同州の新聞社数は、1850年には5つの日刊紙と50の週刊紙だったが、1860年までに15の日刊紙と130の週刊紙に増え、ほぼ三倍だ (William H. Taft, *Missouri Newspaper* 50-52)。人口増加を上回るペースで、雨後の筍のように現れ出したのである。

この中に、Twain の兄 Orion Clemens が経営する新聞社 Hannibal *Western Union* 紙 (のちに *Journal* と改名) もあった。当時10代だった Twain も印刷工として、新聞記者を兼任して働いていた。Twain 兄弟の他には、数人の印刷工を抱えるだけの小さな新聞社で、購読者は100人から200人程度だったと推測される。近隣の地元新聞は、どこも同じような状況だった。しかも当時の新聞社の多くは、大手を含め数年おきに転売されていく。経営難などで、新聞社の名義 (経営権) だけが売りに出されるからだ。合併や分離も多い。逆に新聞社を始めたければ、頻りに売りに出されていた新聞社の名義を買えばいい。手軽に新聞社を起こせることから、素人に毛が生えた程度の社主も多かった。こうして経営者が変わるたびに、新聞社名が少しずつ変更される。Library of Congress にアクセスして、1840年から1860年代に記録されたミズーリ州の新聞社名を検索すると、400以上が上がってくる。数紙の大手に加えて、商店規模の短命で素人臭い新聞社がひしめき合っていたのである。

Twain 兄弟がいた *Western Union* 紙とその近隣にある地元新聞を Marion County と Ralls County に限定して抜き出して見ていくと、ほとんどが週刊で、一枚を二つ折りにした紙面に4ページ構成で発行していた⁵⁾。つまり当時の新聞は、用紙一枚裏表に、地元情報、投資や物価、政治問題、広告などの記事で埋めていくのだが、商店規模の地元新聞に専属記者を雇えるわけもなく、毎週のように衝撃的な記事を入手できるわけもない。それゆえ素人文士の投稿や通信文で記事を補い、さらには他紙の目立った記事を転載しては、その週の発行にまでこぎつけるのである。当時の新聞業界に裏取りなどという概念はなく、著作権の意識も低かった。むしろ情報元が不確かな素人投稿や通信と、他社からの転載記事で成り立っていたのである。

そこへ、市井の人々は、聞きかじった笑話や自慢の小話を、つまり「開拓民話」を新聞に持ち込むようになる。物書きの覚えがある者が、「開拓民話」を文字に起こして、小遣い稼ぎに新聞社へ売ったのである。紙面上とはいえ、語られたまを再現するため、方言 (話し言葉) を音声に合わせて文字化する eye dialect も使われ、開拓民たちの声が地方色とあいまって精彩に浮かび上がってくる。新聞社は、人気作家の法外な執筆料を支払えないため、素人が

書いてきた「開拓民話」を歓迎した。新聞記者が、酒場や船着き場で聞きつけた「開拓民話」を紙面に載せることもあれば、自ら創作して掲載することもあった。本来「開拓民話」は、記事が足りないときの埋め草として利用されていたが、第一面を飾る目玉となり、読者を惹きつけるようになっていく。書物が貴重品だった開拓地であって、読み物に飢えていた民衆は、一枚刷りの手軽で安価な新聞紙を、情報源というだけでなく、貴重な読み物であり娯楽として飛びつくようになっていたのである。

上記のような現象が、他州の開拓地においても起こっていた。こうして紙面に載った民衆の語り（「開拓民話」）は、新聞購読者という民衆の目に広くさらされ、人気が出ると、他紙に転載され、生き残っていくこととなる。あまたのひしめき合う民衆の語りは、あまたのひしめき合う新聞社の中で、転載という形で、選別淘汰されていったわけだ。なかには州を越えて転載されて全国的に有名になることもあれば、東部で注目を浴びて一気に全国的になることもある。文化の中心部であった東部にあっても、New York *Spirit of the Times* 紙を中心とする新聞社が、各地の無名文士から募った「開拓民話」を掲載して、好評を得ていたからだ。

これがいかに特殊であるかは、イギリス・ヨーロッパの民話と比べると一目瞭然だ。通常、民話とはある特定の共同体の中で、数世代にもわたって口承で共有され、長年かけて地元へ根付いた文化遺産である。すでに作者も定かなくなっている。ところが新移民の国アメリカでは、18世紀からバックグラウンドの異なる開拓民たちが大量に流れ込み、絶えず移動し、新天地を拡大してきた。国家としては建設期にあった19世紀半ばまで、開拓地では、一部の例外を除いて、ミズーリ州で見てきたように人口拡大と移動が続いていた。そこに「開拓民話」が芽生えても、根付く土壌はなかった。しかし、新聞という媒介を得て、流動を続ける人民の間で瞬く間に共有されることとなっていく。民話ではできたそばから新聞紙面に載るため、作者が明確なこともあれば、当時まだ存命中の人物にまつわる話も多かった。当時の人々にとっては、民話というよりは、地元の世間話であり、尾ひれつきのルポタージュのようなものだっただろう。しかしながら、ここから Mike Fink や Davy Crockett などの名だたる開拓民ヒーローとその伝説が生まれてきたのである。他国の民話のように、民衆の声から生まれ、民衆の間で淘汰されたものだけが、民衆全体で共有され継承される。この点では間違いなく民話と言えるだろう。「開拓民話」こそは、近代の流動社会で生まれた変異民話であり、新興民話だったのである。世界でも類を見ない極めて特殊な民話だったことは明らかだ。

この同じ1840-60年代に、新聞紙面の民話は劇的な進化を遂げる。というのも高まる需要を受けて、一部の素人文士や記者が「開拓民話」を真似た創作短編を投稿して、頭角を現すようになったからである。彼らの作品は“humorous sketch”と呼ばれてもはやされ、サブカルチャーながら comic journalism という分野を確立するまでに至る。彼らは、文学者というよりは、エンターテイナーとして認識され、humorist と呼ばれて絶大な人気を誇るようになっていく。

Twain もそのひとりで、すでに流通していた民話を脚色し、大幅な創作を加えたのが“Jumping Frog”である。これらの“humorous sketch”は、民話と同じように、語り手が方言を用いて自分の体験や地元の世間話を面白おかしく伝えるのだが、frame narrative という手法が導入され、読み物としての技巧を凝らし、滑稽味や臨場感を増す文才を見せつける。イギリスから輸入された Charles Dickens の *The Posthumous Papers of the Pickwick Club* (1837) を真似て、ドタバタ喜劇の様相まで呈していた。それまでの素人が投稿していた平易な「開拓民話」とは一線を画したのである。実はあまり知られていないが、*Uncle Tom's Cabin* の作者 Harriet Beecher Stowe もまた humorous sketch の名手であった。特に彼女の“The Parson's Horse-Race”は爆笑の名作で、一流作家の腕の違いを実感したければ、ぜひ参照されたい。

星の数ほどいた素人投稿者や humorist は、comic journalism の凋落と共に消えていったが、その中から Twain や Stow のようなアメリカを代表する作家が輩出されていく。彼らは、この民話系の創作作品から Southern humor と呼ばれる地方文学を生み出し、American humor という文学ジャンルを確立させたのである。ちなみに、当時アメリカで生まれた文学者といえば、James Russell Lowell や Henry Wadsworth Longfellow のような東部のエリート知識層に限られており、しかも彼らはイギリス・ヨーロッパの文学伝統を律儀に引き継いでいた。だが彼らの文学は、高価で、開拓地にはなかなか流通してこない。つまり開拓地は、旧世界や東部の文学伝統から切り離された環境において、自然発生的にアメリカ特有の文学を育み、ここからアメリカ文学のリアリズムが醸成されたわけだが、その源泉の一つに民話があったことは間違いない。要するに、「開拓民話」という民衆の語りや、新聞紙面で、アメリカの純国産文学の一つへと進化していくことになる。

そこで本論では、新聞に投稿された民衆語りの中でも、素人文士や作者不明の平易なものを「開拓民話」と呼び、著名な作家が執筆した民話形式の創作作品や再話文学を「開拓民話」風短編と呼ぶこととする。ただしこの両者を区別できるだけの明確な定義があるわけではない。なぜなら元は大衆の娯楽から出発しているため、どこからが不特定の公衆民話で、どこからが作家文学なのか判然としない特殊な分野であったことは特記しておきたい。

ところで本論では開拓民の語りを「開拓民話」あるいは“American folklore”と呼んできたが、これらが folklore として認識されたのは、20世紀初頭になってからのことである。19世紀半ばまで開拓民たちは自分たちの小話を伝承文化などという高尚なものだとは考えておらず、“yarn”や“tale”あるいは“sketch”と呼び、日常の一つと考えていた。しかし R・ドーソンによると、「1930年代および1940年代には（中略）どちらかと言えば突如として、アメリカ国民は自分たちがいわゆるアメリカ民間伝承を保有していることに目覚め」（10）ることとなる。これにより民俗学者は、1840-60年代の新聞紙面に隆盛する開拓民の語りを folklore と認識し、盛んに収集編纂をしていった。つまり文献に folklore を見出したわけだが、その定義や分類ま

たは成立過程には一切関心を示さず、イギリス系民話や黒人民話なども一緒くたに扱っていた。

folklore という言葉が明確化されないまま、学术界の潮目が変わったことで、さらなる混乱を招くことになる。民話研究はもともと文学部に属していたが、文化人類学部が新設されると、そちらに引き継がれるようになる。文化人類学における folklore とは、今を生きる人々の生活や精神性に根差した伝承文化や習俗全般を指す。それゆえ同学部の研究者たちは、folklore の一部として、現代のアメリカ人たちに伝わる口承民話を収集し始めたのである。文学部は過去にこだわり、文化人類学部は今に生きる、と言われているようだが⁶⁾、時間軸の異なる両者が併存することで、folklore という用語はさらに混迷を深め、類型化も進まなかった。

確認しておくが、本論における American folklore とは、本論で「開拓民話」という独自の用語と分類を設定して系統化したものであり、1840-60年代の流動社会にあって人と新聞を媒介として短期間で流通・定着した新興民話のことである。従前の文学研究では、“folktale” “sketch” “yarn” “humor” と呼称もまばらであったが、本論の系統化により初めて American folklore の特殊な成立過程と、それが作家と文学伝統および国民全体に及ぼした影響が浮き彫りとなる。

3. 民話にみる「騙す / 騙される」娯楽文化

文化人類学系の郷土収集家 Vance Randolph は、オーザック地方に伝わる tall tale を収集編纂して、*We Always Lie to Stranger* (1950) という題名で出版した。この題名が示す通り、tall tale は法螺を膨らませることだけでなく、よそ者 (stranger) を騙してこそ楽しさが増す、と序文で認めている。tall tale の「騙す」という娯楽文化が、開拓期の Jim Bridger から近代まで連綿と引き継がれていたことを示している。そして tall teller は、昔も今も、地元の常識に疎い stranger を狙って仕掛けてくる。

19世紀初めにアメリカを訪れた外国人たちも、tall tale 好きのアメリカ人たちの被害に遭ってきた。Captain Marryat は自らの旅行記 *Diary in America, Series One* の序文で次のように述べる。

There is no country perhaps, in which the habit of deceiving for amusement, or what is termed hoaxing, is so common. Indeed this and hyperbole constitute the major part of American humor. If they have the slightest suspicion that a foreigner is about to write a book, nothing appears to give them so much pleasure as to try to mislead him: this has constantly been practiced upon me, and for all I know, they may in some instances, have been successful . . . (v)

tall tale は hoax とも呼ばれるが、後者はとにかく騙すことが目的で仕掛けられた場合に用いられ、いたずらそのものを指すこともある。これを、アメリカ人は「娯楽」として日常的に楽しんでいたが、そのように騙すことを楽しむ国民は他にいないだろう、と記している。

しかしこの「騙す」娯楽は、外国人や旅行客をからかうためだけでなく、新参者や新入りに対する一種のイニチエーションとして機能するようになっていたとして、Mody C. Boatright は次のように説明する。

Frontiermen, like doctors and lawyers and college professors and gangsters, prescribed the conditions under which an outsider might become a member of the group. Hoaxing and practical joking served them as a sort of initiation ceremony. Mountain men, scouts, cowboys, and Texas Rangers felt that they had the right to know the temper of the men who were to be associated with them in such relationships that each man's survival often depended upon his fellows. They would not admit to their fraternity one who could not "take a joke." (*Folk Laughter on the American Frontier* 61)

本論の冒頭で紹介した、Jim Bridger のインディアン話が、まさにこれに当たる。フロンティアでの仕事は危険で、過酷な自然を生き抜く技能や、インディアンなどとの抗争に耐えうる武力も必要とされた。フロンティアでの生死は、仲間たちの才覚にかかっていたのである。そこで新参者が入ってくる時、あるいは若手を補充したさい、tall tale を仕掛けて、「冗談が通じる」人間かを見極めてから、仲間入りを許したという。

tall tale や hoax によるイニシエーションは町中でも行われていた。そこで Twain が17歳のときに執筆した民話“Historical Exhibition—A No. 1 Ruse” (16 September 1852, *Early Tales & Sketches Volume 1* 79-82) を紹介したい。Twain がくだんの Western Union 紙で働いていたとき、兄の Orion が不在中に、独自の判断で掲載させてしまったという、いわく付きの記事である。ちなみに、記事に登場する人物や団体名は、Twain の地元 Hannibal で実在している。それゆえ Twain は、友人の Jim から聞かされと前置きしたうえで、次のように語り出す。要約すると、Curts & Lockwood 商店の Curts さんは、店内で、ある種の見世物を有料で公開しているというニュースが広まった。見世物には“Bonaparte crossing the Rhine”という魅力的なタイトルがつけられていて、店主の“lecture”つきで鑑賞できるという。そこへ未成年の Jim が、仲間を引き連れて店へと走りこんできて、「いますぐ見世物を出しておくれ、Curts さん。お代はいくらだい」と肩で息をしながらも、いつときも待てないとばかりに切り出した。店主が「はい、はい、‘Bonaparte crossing the Rhine’ が見たいんだね、それでいいんだね」と念を押すと、Jim は「そうだよ、それだよ。早く、早く、Curts さん、どうしても見たいんだよ」

と、せつついてくる。

ここで少し解説しておくが、当時はピューリタン伝統が根強く、下世話な見世物は厳しく制限された。というよりも、道徳的・教育的な出し物以外は許されない世情だった。また宗教的な禁欲運動に加え、ヴィクトリア朝的道德観が浸透していて、性的なものを潔癖なまでに排斥した時代でもある。だが、このような抑圧的な社会では闇の商売が生まれてくるもので、“lecture”（公衆教育）と偽って、卑猥な興行を出す者も現れてきた。“Bonaparte crossing the Rhine”とは、19世紀アイルランドで生まれた楽曲で、Napoléon Bonaparte が軍を率いてライン川を渡る場面を、つまりナポレオン軍の出陣をモチーフにした行進曲である。具体的な史実を指しているわけではないため、歴史の勉強になるとは思えず、店主の“lecture”も疑わしいものである。記事の文脈から読み取るに、店主はフランスから卑猥な絵でも手に入れて、それを教育的見世物と称して店先で見せて小金を稼いでいるらしい、と近所のやんちゃな未成年男子たちの間で話題になったのだろう。というより、大人たちの様子からそう推測して、盛り上がったのだ。開拓地らしい商売のやり方である。以上のような事情により、Jim が好奇心を抑えきれなかったのも無理はない。

話を戻すと、店主は Jim に急かされて、引き出しから豚足の骨を取り出すと、面前に押し出して、こう言った。「さあ、よく見るんだ、‘Bonaparte’ もとい ‘Bony-part（骨部分）’だ。見えてるかい、豚足の ‘bony-part’ だよ。「それがどうしたっていうだ！」と Jim が苛立つと、店主はこう答える。「大事なのはこれからだよ。ここに豚足の ‘rind’（皮）もあるからね。‘Rhine’ は正式には ‘rind’ と発音するんだよ。さあ、お立合い、ここからが肝心だ。よく見ておくれ。」と言うと、もったいぶった手つきで、豚足の骨なるものを豚皮のうででゆっくりと滑らせて、「これがほんとの、‘bony part crossing the rind’ だ」と締めくった(79-82)。要するに ‘Bonaparte crossing the Rhine’ のダジャレでお茶を濁しただけなのだが、呆然とする Jim をよそに、周りで見物していた大人たちは大爆笑。ちなみに *Early Tales & Sketches Volume 1* の注釈によると、“‘bony part’ crossing the rind is typical country-store phallic humor” (78) としており、このダジャレは当時の大衆の間で密かに流布していた erotic folklore の一種でもあった。この erotic folklore については次章において改めて論じたい。

Jim は、この人を食った店主の詐欺に抗議するのをあきらめて、大人たちの笑いにも耐えたという。「冗談が通じない」男という風評のほうが開拓地では痛手だからである。若者が大人になる過程で性に興味をもつのは自然なことである。その成長段階に仕掛けられた hoax は、まさに大人社会へ入るためのイニシエーションであった。これを乗り越えれば、類似のペテンで騙されている若者を、大人たちに交じって笑える。それこそ、大人の証だ。言い換えれば、大人たちは、若者や新入りを自分たちの共同体に引き入れるために、tall tale や hoax を仕掛けていたのであり、騙す側に、騙される側の協調があってこそ成り立つ話芸であったとも言え

る。

いずれにせよ、イニシエーションや大人の度量に関わるせい、tall tale や hoax の被害者たちは滅多に怒らない。いやむしろ騙されることそのものを楽しむという独特の気風が開拓地にあった。それを証明するため、もう一つ Twain の記事を紹介したい。Twain は、兄の零細新聞社を見限って、ミシシッピ川を運行する蒸気船のパイロット（操舵手）へと転職し、そこで、“Pilot’s Memoranda”（30 August 1860, *Early Tales & Sketches Volume 1* 142-43）と題した通信文を St. Louis *Missouri Republican* 紙に投稿した。当時は蒸気船の最盛期で、ミシシッピ川沿いの開拓地で流通と移動の根幹をなしていた。だが、蒸気船に決まったスケジュールや時刻表はない。運河の治水工事は不十分であったため、航行や速度はパイロットたちの腕に負うところが大きかったからだ。天候や水嵩の影響も大きく受けるため遅れや運休も多く、船着き場も便宜変更された。従って当時の開拓民は、新聞に掲載された運行ニュースを見て、特にパイロットによる現場からの運行情報を頼りに、大体の算段をつけて船着き場で待っていた。当時の生活に欠かせない情報だったのである。

Missouri Republican 紙は1ページ11段（column）になっていて、そのうちの2段弱にわたって蒸気船情報を掲載している。“River News”と太文字の見出しをつけて、その下に、各蒸気船が航行している場所と、次の停泊地までの到達予想日数を羅列している。続いて Twain が書いた運行情報“Pilot’s Memoranda”が置かれ、最後に“Boat Leaving To-day”という見出しのもと、こちらもパイロットから寄せられた、出航間近の船舶情報が配されている。

Twain の記事では、彼が8月22日から27日にかけて、蒸気船 Arago 号のパイロットとして航行した地名と停泊地を時系列に沿って列挙している。追い越していった船名まで報告するので、他船の運行状況も分かる。一見すると、なんの変哲もない運行情報なのだが、奇妙なことに、Arago 号は追い越していくばかりで、決して追い抜かれぬ。異常なほどの速度を見せつけ、Arago 号が他船に遅れをとったことなどないと豪語まで始める。そこでよく見てみると、列挙された船名も船着き場も地名も、全て架空なのだ。さらに Arago 号が横切ったとき、Capt. Bladders（法螺吹き船長）の蒸気船 Tycoon 号（こちらは実在する船）は浅瀬につこんでしまい、前のめりのまま動けなくなっていたという。だがメインデッキ（船下部の貨物倉庫）に積んでいる鉄材を最上階の後部に移動して、バランスを取っているところだから間もなく出発できる模様、と報告する。もちろん全て冗談である。Twain が本当に Arago 号のパイロットをしていたこと以外、最初から最後まで法螺を並べた、tall tale だった⁷⁾。

このような紙面配置で、本物のパイロットからの通信文を載せれば、誰もが疑わずに読んだことだろう。新聞の編集者までが、この tall tale に加担して、読者を騙しにかかっていたのだ。もちろん新聞社は、売り上げ優先なので購読者の不興を買うようなことはしない。むしろ読者は騙されたと分かった瞬間、笑い出すだろうと踏んで、楽しませることを意図して掲載してい

る。つまり騙すだけでなく、騙されることもまた娯楽だったことが分かる。

Twain はこれ以後も、tall tale を新聞に発表し、読者を騙し、笑わせることで、全国的な人気を得る。tall tale の「騙す／騙される」娯楽文化は開拓地だけでなく、アメリカ全土に浸透していて、アメリカ人特有の文化となっていたことを物語っている。それゆえ tall tale は新聞という媒介を通して、不特定多数のアメリカ人に対して、騙しのイニシエーションを仕掛けていたことになる。騙されて、それを面白い冗談だと共に笑い合える者だけが、連帯感を強めていける。tall tale はアメリカ人のイニシエーションとしても機能していた。

この「騙す／騙される」娯楽文化を知り尽くし、全米にたいして hoax を仕掛けたのが、稀代の興行師でありペテン師と言われた P. T. Barnum ではないだろうか。彼は、80歳にもならない黒人女性を George Washington の元乳母で160歳を超えていると称して見世物にし、サルの上半身と魚の下半身をくっつけただけの置物をフィージーの人魚と偽って展示した。石膏造りの Cardiff Giant を古代人の化石として売り出し、Fox Sisters の交霊会を興行に出して一大ブームを巻き起こしたこともある。いずれの場合も見え透いたペテンで、いけしゃあしゃあと嘘に嘘を重ね、荒唐無稽な珍品を誇らしげに披露する厚顔ぶりは、まさに tall tale の手法だ。だがそれが人気の秘訣だった。これら見世物巡業は全米で人気を呼び、見物客は行列を成して観覧を楽しんだ。tall tale や hoax の先行研究は多いが、騙された側の心理が論じられたことはない。それゆえ、これまで指摘されたことはなかったが、当時のアメリカ人たちは Barnum の hoax に騙された哀れな犠牲者ではない。彼らは娯楽として騙されに行っていたのだ。Barnum の呆れるほどの法螺の吹き様に、さぞかし笑ったことだろう。詐欺だと怒る者などいなかった。

だがその感性を持ち合わせているのは、アメリカ人だけである。亀井俊介は次のように言う。

バーナムは自叙伝『P・T・バーナムの生涯』を出版した。(中略) そのなかで、彼は先の「フィージーの人魚」をはじめとするペテンの内幕を公然と語ってみせた。おかげで彼は——特にイギリスで——一挙に悪名が高まったという。じつのところ、彼の筆致にはペテンを正直に語る大胆さと、それを一種楽しむようなトール・テール(法螺話)性があるのだが、イギリスの批評家たちはそういう点を見逃してしまった。(『サーカスが来た!』28)

これまで見てきたように、tall tale や hoax では最後のネタばらしが笑いのクライマックスとなる。Barnum もその定石に則って、サービス精神で、笑わせようとして、ペテンの内幕を晒したのだろう。だが、イギリス人たちには笑えなかった。騙されたと怒ったのである。イギリス人たちは、アメリカ人に仲間入りできるイニシエーションに失敗したのである。

本章の冒頭で tall teller は、昔も今も、地元の常識に疎い stranger を狙って仕掛けてくると

述べたが、その現場を見てみたければ、Twainの著書 *Life on the Mississippi* (1883) を読むといい。彼は蒸気船業の最盛期であった1860年代にパイロットとしてミシシッピ川を幾度となく航行していた。その20年後、東部で作家として名を成した Twain が、この懐かしのミシシッピ川を再訪し、蒸気船で川を下りつつ、過去の南部へと思いを馳せる旅紀行である。この旅の中で Twain は stranger であった。この一人の stranger に対して、地元民がひっきりなしに各々の自慢の語りを、特に tall tale を仕掛けて騙そうとしてくる。それを迎え撃つ Twain もかなりしたたかだが、とにかく楽しんでいるのだ。これらに加えて、自分がパイロット時代に仕掛けられた tall tale を、思い出すまま紹介している。こうして同著に収録された民話を見ていくと、その種類の豊富さと、それらに遭遇する頻度の多さに驚かされる。庶民の間で tall tale という「騙す／騙される」娯楽文化がいかに隆盛していたか分かるはずだ。しかも他国の民話は共同体の中だけで語られ巡回していったが、tall tale は、共同体の外から大量に流れてくるよそ者 (stranger) を狙って仕掛けられる。よそ者は騙しのイニシエーションを経て共同体へ取り込まれることもあれば、さらに共同体の外へ、見知らぬ土地の見知らぬ人間へ、流動する移民たちと共に tall tale を拡散させ、アメリカ全体を騙し、笑わせ、イニシエーションしていった。それゆえ tall tale で最も多い登場人物が、stranger か traveler なのだ。tall tale は、移民という stranger と共存・拡大していく時代だからこそ生まれた文化であったともいえる。

4. 鉱山飯場 Angels Camp の erotic folklore

以上のようにして流動を続ける移民たちと共に、「開拓民話」はカリフォルニア州まで伝播していった。カリフォルニアは1850年に合衆国31番目の州となり、その前年から1855年までのゴールドラッシュで30万人の移民が流れ込んできた。とはいえ、それから1865年までの10年余りで、当地で急成長を遂げる新聞・雑誌業界では「開拓民話」と「開拓民話」風短編がすでに隆盛していたことを考えると、民話の拡散速度は驚異的と言わざるを得ない。そして同州の Calaveras County という西部最果ての地まで民話はもたらされる。そこは山岳が広がる金鉱地域で、急ごしらえの飯場 (camp) が点々と設置されて、大勢の鉱山掘りが入植して、突貫工事の発掘作業にいそしんでいた。Angels Camp もその一つだったが、Twain が滞在していた1865年には、金発掘量の減少と共に鉱山掘りたちが次々と引き上げて、空き家となった cabin が並び、小さな酒場があるだけの、寂れた飯場になっていた。もちろん、女性はいない。この自然に囲まれた、隠れ里のような小さな共同体にまで数々の民話もたらされ、醸成され、Twain をとりこにしてしまう。飯場という過酷な環境にあって民話だけが唯一の慰みであり娯楽だったからだ。Twain はここで聞いた民話を元に、“His Jumping Frog” を、つまり彼の tall tale 代表作を執筆している。

要点だけをかいつまむと、物語の語り手が東部の友人に頼まれて、鉱山飯場（改訂版では Angels Camp と明記）の Simon Wheeler という人物を訪ねて、牧師の Leonidas W. Smiley の消息を聞くことになった。だがこれは友人の罠だった。Wheeler 爺さんの前で、Smiley の名前を出せば、必ず、賭け狂いで有名な Jim Smiley の話を持ち出してくると分かっている、行かせたのだった。Smiley 話は、Wheeler 爺さんの十八番だったから、一度捕まると、延々とその話に付き合わされる。飯場連中も Wheeler 爺さんの犠牲になってきたのだろう。語り手にも、その洗礼を受けさせようとしたわけだ。

Wheeler 爺さんは案の定、語り手を抱え込んで、Jim Smiley の賭け遍歴について語り始めた。それによると、Smiley は賭けられるなら何でも誰とでも賭けをする男で、ついに stranger とカエルの高跳び競争で賭けをしたとき、知らない間に stranger が自分のカエルに散弾を飲み込ませていたので、負けてしまう。ただこれだけの話であるのに、「読者がこの作品に尽きない魅力を感じるのは、ほとんどその『語り方』の見事さにある」（『マーク・トウェインの世界』81）という亀井の解説は、批評家の間でも一致した見解である。言い換えれば、Smiley が stranger にしてやられたというだけの落ちでは誰もが物足りないと感じていたということだ。また、これまで tall tale の魅力は「騙す」ことであり、「騙される」人間を見て笑うことだと論じてきた。だが語り手が友人に騙されて年寄りの長話に付き合わされたという程度では、騙され方が何とも手ぬるくて笑えない。

しかしここで視点を変えるため、*Roughing It* (1872) 第53章に収録された、Twain による別の民話風短編 “Jim Blaine and His Grandfather’s Old Ram”（以後 “His Grandfather’s Old Ram” と省略）を紹介したい。これもまた、Angels Camp で仕入れた民話を元に創作された tall tale で、“His Jumping Frog” とはタイトルが酷似しているだけでなく、語り手が友人に騙されて酔っぱらいの長話に付き合わされるどころまで同じである。事の始まりは、語り手が、Jim Blaine の祖父さんが飼っていた老いぼれ雄羊の話が非常に面白いから聞いてみるべきだ、と飯場仲間から勧められたことだ。しかし Blaine は程良く酔っぱらって機嫌のいいときにしか話し出さないとのことで、なかなか機会に恵まれない。聞けないとなると、是が非でも聞いてみたくなるもので、そんなお仲間から知らせが入る。Blaine がいよいよ語り始めるというのだ。語り手は慌てて酒場へ駆けつけ、すでに待ち構えている飯場仲間と共に、Blaine の語りに耳を澄ますのである。だが Blaine はすぐに話を脱線させてしまう癖があって、なかなか羊の話にたどり着かない。我慢して聞いていると、とうとう Blaine は話し疲れて眠ってしまった。ここでようやく「騙された！」と語り手は気付く。仲間たちは涙を流して大笑いしている。笑い声を抑えきれず、息も絶え絶えだ。これまで Blaine が羊の話に行き着いたことなど一度もなく、羊がどうなったかは誰にも分からない、という落ちであった。

ところで Twain は、この話を自分の講演で朗読するときだけ、結末を変えていた。2010年

に講演用原稿が公表されたことで初めて判明したのだが、Blaine はちゃんと羊の話にこぎつけていた。詳しく見ていくと、Blaine の祖父さんが年老いた雄羊を買って帰り、牧草地に放してやったという。次の朝、祖父さんは雄羊の様子を見に行き、草の中に10セント硬貨を落としてしまう。それで四つん這いになって草の中を探す羽目になったのだが、その様子を雄羊がたまたま丘の上から眺めていた。15フィートほど下ったふもとの祖父さんを観察している。だが祖父さんは羊に背中を向けて四つん這いだから気付かない、としたうえで、Blaine は次のように続ける。

そんでな、雄羊はすぐあっちに立っててよ、わしの祖父ちゃんはすぐここで、わかるだろ、しゃがんで草の中をさまぐってたらよ、老いぼれ雄羊が祖父ちゃんのそんな仕草を見てよ、お誘いだと受け取っちゃまったわけさ——で、雄羊は向かったさ！時速30マイルで丘を駆け下りて、お勤めのことしかもう目に入ってない。分かるだろう、祖父ちゃんは雄羊に尻を向けて、こんな風にしゃがんでるから、もちろん、雄羊は——ああ、そうだった！」（『マーク・トウェイン完全なる自伝』369）⁹⁾

絶妙のタイミングでBlaine は違う話を思い出して、脱線してしまう。やはりここでも、羊がどうなったか分からずじまいだ。とはいえ、出版本（*Roughing It* 収録版）に比べると、蛇の生殺しのような状態に置かれた語り手を想像すると滑稽さは増す。しかも出版本には明記されていなかったが、語り手は羊にまつわる色話を聞かせてもらえると騙されて、のこのことやってきたということになるから、余計に滑稽だ。“Historical Exhibition—A No. 1 Ruse”で、周りの大人たちに騙されて、卑猥な物を見せてもらえると走りこんできた青年たちの姿と重なるはずだ。

絶妙なタイミングで中断された、この大変卑猥な羊話は、Angels Camp で密かに流布していた erotic folklore の一つ、いわゆる艶話だったと考えられる。erotic folklore とは、17世紀イギリスからもたらされ、ヴィクトリア朝時代にあっても途切れることなく、民衆の間で受け継がれてきた民話やバラードあるいは冗談のことを指す。“erotic life”を扱っているため“unprintable”とされ、これまで記録には残されてこなかったが、Randolph が *Roll Me in Your Arm: “Unprintable” Ozark Folksongs and Folklore* (1992) を出版し、A4版700ページ以上にわたって、オーザック地方に残る erotic folklore を紹介した。同著の内容は、文学と文献に残るアメリカを研究してきた者にとって、特に日本の研究者にとって、常識を覆す衝撃的なものと言わざるを得ない。これを見ると、アメリカにおける erotic folklore は、紙面には残っていないだけで、非常に豊かな伝統文芸だったようである。「開拓民話」も erotic folklore を多分に取り込んで発展していたようだが、新聞に掲載されるさいは、編集者と世論

という非常に厳格な検閲を経て、性的な部分は徹底して削り取られてしまっていた。そのため拙論のような文学・文献研究では、本来、交わることのなかった貴重な分野でもある。

羊話から推測するに、Angels Camp という寂れた鉱山飯場では、男ばかりという特殊な環境にあって、erotic folklore が盛んになっていたのだろう。事実 Twain はそこで幾つもの erotic folklore を聞き込んでいた。その一つが“The Burning Shame”である。“burning shame”という言葉は現代にも残っているが、本来はイギリスの15～16世紀までさかのぼる、非常に卑猥なヌードショーまがいの喜劇演目である。この筋書きだけが艶話として民衆の間で密かに語り継がれていたわけだ。*Adventures of Huckleberry Finn* (1884) では、詐欺師 king と duke が、アーカンソーの僻地で、いかがわしい闇公演をすると見せかけて、客から金を巻き上げようと目論み、ポスターに“The Burning Shame”と書いて宣伝する。この言葉に釣られて、近隣の男どもは群れを成して押し寄せてくる。だが行ってみると、目当ての内容とは程遠く、詐欺だったといういつもの展開だ。問題は、当時の人々が“The Burning Shame”を民話で聞き及んでいたことだ。erotic folklore を口承伝統として密かに共有していたことを示している。しかし Twain 自身が、“The Burning Shame”を卑猥すぎて不適切だと自己判断して、婉曲的な表現に変えて出版している (*The Annotated Huckleberry Finn* 260-68)。Twain もまた erotic folklore を紙面から削り取ったひとりだったわけだ。

要するに当時の民衆にとって erotic folklore の存在は広く知られていたが、密かに語り継がれているため、機会がなければ、耳に入らない類の娯楽となっていた。だからこそ“His Grandfather's Old Ram”の語り手も、羊の艶話 (erotic folklore) を聞かせてもらえると知って、酒場まで駆けつけた。あのような幼稚な猥談がそれほど聞きたいものか、と現代人なら思うだろうが、当時の抑圧的な世風を思えば理解もできる。先にも触れたが、当時は性描写に大変厳しく、特に女性の性を語ることが絶対に許されなかったからである。19世紀半ばにかけてアメリカを席卷したヴィクトリア朝的価値観にあって、女性は家庭の天使として扱われた。この天使という聖なる存在を、性の対象として見ることそのものが許されなかったのである。家庭の天使として、妻・母親であることを望みながらも、彼女たちの性的な匂いを潔癖なまでに嫌うのは矛盾した態度ではあるが、いずれにせよ当時の文学・文献の中で女性の性を匂わせるものは徹底して排除された。実は Twain は女性性を徹底的に削り取った作家のひとりでもあった。彼は、男性の肉体美を賛美することはあっても、一般女性の肢体については決して触れない。女性美を扱うことそのものが危険だったのである。当時は性を匂わせるがゆえに、妊娠と出産について語ることもさえはばかられた。それゆえ Twain の出版作品において一度たりとも扱われたことはない。夫婦関係ですら細心の注意を払って、極めて限られた範囲で描かれている。そこで性を仄めかすことがあってはならないからだ。

19世紀半ばは、こうした抑圧的な時代であって、性表現や性を扱った芸術や伝統は、erotic

folklore 一点に封じ込められるという、いびつな状態に陥っていたのである。道徳検閲の厳しい、いわゆる性の言論統制を課された社会では、erotic folklore の世界においてだけ、自由に性が語られているのだから、ひどく魅力的で堪え難い好奇心にかられるのも当然だ。だからこそ Twain は想像力を刺激され、“Historical Exhibition”、“His Grandfather’s Old Ram”、“The Burning Shame”にあるように、卑猥なものを見せて（聞かせて）もらえると担がれて、期待する男性たちに、意表をつく裏切りが待っている、という騙しのパターンを tall tale として構築したのである。

最後に、“His Jumping Frog”とは

上記のパターンから類推すると、“His Grandfather’s Old Ram”では語り手が羊の艶話を目当てに Jim Blaine の元へ走ったように、“His Jumping Frog”の語り手もカエルの艶話を聞きたくて Jim Wheeler の元を訪れたことは間違いない。本文には明記されていないものの、東部の友人から牧師の Smiley と言えば、カエル話の Smiley になるはずだと教わってきたのだ。繰り返すが、道徳的な目的を装うのは、当時の闇公演の常套手段だ。倫理規制の厳しい東部では絶対に触れることのできない艶話が、カリフォルニアの寂れた鉱山飯場なら聞かせてもらえると噂になっていたのだろう。当時の教養であったギリシャ神話・民話によれば、カエルは豊穡の女神やアフロディーテと結び付けられ、そこから情事にふける女性を連想させる。こうしてカエル民話は、性に放埒なギリシャ民話と重ねられて、卑猥な話を期待されていく。実際に“His Jumping Frog”を発表後、この話の起源はギリシャ民話ではなかったと質問してくる読者がいた、と Twain は面白そうに報告する (*How to Tell a Story and Other Essays* 149-51)。

しかし Wheeler 爺さんは、本当に散弾を飲み込んだカエルの話しをしただけで、そこに卑猥な connotation など意図していなかった。ちなみに、このカエル話の種本と目されている民話が幾つかあるが、いずれにも卑猥な意図はない。語り手は完全に騙されたのだ。都会人を気取り、鉱山飯場を泥臭いフロンティアだと見下して、そこでしか聞けないというカエル艶話の噂に騙されてのこのことやってきた自分が、なんともばつが悪い。飯場連中は、また東部人がカエル話に釣られてやってきた、と笑っていたことだろう。この作品の改訂版は“Notorious Jumping Frog of Calaveras County”と題名を変更しており、「卑猥で有名な」カエル話としてるのが面白い。読者に対して、幻のカエル艶話が目当てだろう、とからかっているからだ。

実際にカエルの艶話があったのかもしれない。Angels Camp で流通していた erotic folklore は、動物を使った猥談や寓意風の艶話が盛んだっただからだ。例えば、19世紀の俗語で、“shot in the giblets or tails (鳥の臓物[尻尾]に入った散弾)”と言えば、妊娠を意味し (*The Routledge Dictionary of Historical Slang* 837)、性行為そのものを連想させる。「カエルに入っ

た散弾」は、さらに卑猥な connotation があっても不思議はない。A *Tramp Abroad* (1880) 第3章に収録された“Jim Baker’s Blue-Jay Yarn”もまた Angels Camp で仕入れた民話を元にしており、その中でアオカケスがへとへとになるまで“knot-hole”にドングリを入れている。このアオカケスの動作もまた寓意風に色事を表して¹⁰⁾、密かに読者を楽しませていた。先の羊話も、幼稚で下品な色話だが、講演に来ていた老若男女は大いに喜んだとのことだ。

Twain の tall tale は、カエル、羊、アオカケスという動物色話へ、つまり erotic folklore へと誘ってくれる。だが誘っておいて肝心なところは見せないという詐欺の手口が心憎いのだが、その先には確かに“unprintable”な民話の世界が無尽蔵に広がっていたのである。“His Jumping Frog”の語り手は、“unprintable”な民話の世界に釣られてきた犠牲者のひとりであるが、tall tale はそもそも騙す側と騙される側の協調関係があってこと成り立つ話芸である。騙され笑われることも民話娯楽の一つとして受け入れてこそ、飯場という共同体に、そしてそこが共有する民話の世界へのイニシエーションを果たすことができる。次にはきっと erotic folklore を聞かせてもらえたことだろう。

“His Jumping Frog”が東部で発表されたとき、「開拓民話」への関心が高まっていた。その理由の一つに、erotic folklore への抑え難い好奇心があったはずだ。なぜならそこのみ、ヴィクトリア朝的価値観の息苦しい閉塞感から解放された世界が広がっているからだ。Twain は“His Jumping Frog”において、東部の読者全体にまで、“unprintable”な民話の世界をちらつかせ、たぶらかしていた。これこそ tall tale という民話娯楽の醍醐味だ。たぶらかされたことを、気持ちよく笑うことで、文書や記録に残らない秘匿の、しかもアメリカ特有の伝統文芸へイニシエーションされ、アメリカ人としてのアイデンティティを共有することとなる。“His Jumping Frog”は大衆娯楽から出発し、大衆娯楽の“unprintable”な世界の面白みを抱え込んでいた。この奥深さを理解してこそ、“His Jumping Frog”は笑えるのだ。

謝辞

本研究遂行にあたり、日本学術振興会、科学研究費助成事業（課題番号：22K20042）の助成を受けたものである。ここに厚く御礼申し上げる。

注

- 1) 民俗学者の Bernard DeVotoは*Mark Twain's America* において Mark Twain の文学にfolklore が大きく影響を及ぼしたと主張し、それにもかかわらず folklore が Twain研究において看過されていると嘆く。だが DeVoto 本人も、Twain 周辺の folklore を丹念に追いかけてはいるが、郷土史料研究の域を超えることはなかった (141-178)。
- 2) 詳しい発達史については、『アメリカの民間伝承』(57-103)を参照。
- 3) Jim の民話は、数多くの民話集で取り上げられているが、本論では *Mark Twain's America* (142-144) から引用し、和訳したものを要約した。
- 4) Carolyn S. Brown は *The Tall Tale* において、tall tale が新聞などで盛んに取り扱われたのは1830年から1860年であり、この時期をtall taleの“flush times”だったとしている(39)。だが本論で扱うミズーリ州やカリフォルニア州といった開拓地では、1830年代には新聞社がほとんど存在していなかったため、新聞社が隆盛し始める40年代からを民話の“flush times”として論じる。
- 5) State Historical Society of Missouri の Columbia Center に赴き、同施設のコレクションから、Marion County と Ralls County で営業をしていた地元新聞の記事を複製した。これらの史料から得られた情報を元に述べている。
- 6) アメリカの folklore 研究の概要については *American Folklore Scholarship* を参考とした。
- 7) この記事に関わる情報は全て *Early Tales & Sketches Volume I* の注釈に負うものである (449-52)。
- 8) 正確には Twain が民話を聞いたのは、Angels Camp とその近くの Jackass Hill においてである。ここでは混乱を避けるため、この二つの場所を統一して、Angels Camp と記す。
- 9) 引用著書は、筆者と和栗との共訳で出版されたものである。ここで引用した部分は、筆者の翻訳担当であったため、本論の趣旨に合わせて、数箇所だけ言葉尻を変更している。
- 10) 作品では、アオカケスが、“hole”を「美しいお嬢さん」と擬人化しており、そこに“sperm”を暗示したドングリを入れている。

引用文献

- Boatright, Mody C. *Folk Laughter on the American Frontier*. The Macmillan Company, 1949.
- Brown, Carolyn S. *The Tall Tale: in American Folklore and Literature*. The U of Tennessee P, 1987.
- Cuff, Roger Penn. “Mark Twain’s Use of California Folklore in His Jumping Frog Story.” *The Journal of American Folklore*. vol. 65, no. 256, 1952, pp. 155-58.
- DeVoto, Bernard. *Mark Twain’s America*. U of Nebraska P. 1932.
- Marryat, Frederick. *Diary in America, Series One*. Valde Books, 1839. Reprint
- Partridge, Eric. *The Routledge Dictionary of Historical Slang*. Routledge & Kegan Paul, 1973.

- Randolph, Vance. *We Always Lie to Strangers: Tall Tales From the Ozarks*. Columbia UP, 1950.
- . *Roll Me in Your Arm: "Unprintable" Ozark Folksongs and Folklore*. U of Arkansas P, 1992.
- Taft, William H. *Missouri Newspaper*. U of Missouri P, 1964.
- Twain, Mark. *A Tramp Abroad*. Oxford UP, 1996.
- . *Early Tales & Sketches Volume 1: 1851-1864*. U of California P, 1979.
- . *Early Tales & Sketches Volume 2: 1864-1865*. U of California P, 1981.
- . "Historical Exhibition—A No. 1 Ruse." *Early Tales & Sketches Volume 1: 1851-1864*. U of California P, 1979. pp. 79-82.
- . "Jim Smiley and His Jumping Frog." *Early Tales & Sketches Volume 2: 1864-1865*. U of California P, 1981. pp. 282-288.
- . *Life on the Mississippi*. Oxford UP, 1996.
- . "Pilot's Memoranda." *Early Tales & Sketches Volume 1: 1851-1864*. U of California P, 1979. pp. 144-45.
- . *Roughing It*. Oxford UP, 1996.
- . *The Annotated Huckleberry Finn*, edited by Michael Patrick Hearn. W. W. Norton & Company, 2001.
- Zumwalt, Rosemary Lévy. *American Folklore Scholarship: A Dialogue of Dissent*. Indiana UP, 1988.
- 亀井俊介『サーカスが来た!』平凡社、2013年。
- .『マーク・トウェインの世界』南雲堂、1995年。
- R・ドーソン『アメリカの民間伝承』民族民芸双書85、坂本完春訳、岩崎美術社、1991年。
- マーク・トウェイン『マーク・トウェイン完全なる自伝』山本祐子・和栗了訳、柏書房、2018年。

(やまもと・ゆうこ 短期大学部准教授)